

塚原問答

一

杉木立の根もとの雪の少ない所に、筵をしいて五、六人たむろし、薪をあかあかともやして暖をとつておる。そのような人のかたまりが、大きな杉の根もとは、どこにもある。数えると五十個処もあるであろう。人数にして三百人はたしかだ。或る個処には経文が山と積まれておる所があるかと思うと、書籍が荒縄でしばられたまま、かがり火に照らし出されておる所もある。しかし或る杉の根もとは、立派な経机に、町重に経文が積まれて、筵の上に、更に熊の毛皮などをしいて、立派しやかな僧が、端座しておるのもあつた。恐らく名のある寺の住職であろう。殆ど僧侶の群であるが、中には武士もおり百姓もおる。薪火のあたたかさで、杉の小枝の雪が、とけて、どさつと落ちるので、各処で、わあつという叫び声があがる。夜もふけて、寒さが加わると、薪火だけではおつつかなくなつて、どぶろくを呑み始めた所もあつて、笑い声がしきりにあ

がり始めた。中にはどぶろくがすぎて、なにやらわからないが唄を歌い出した処もある。

ここは大聖人さまのおる塚原の三昧堂まじかの場所である。時は文永九年の正月十五日の夜、塚原の山野を埋めつくした、かがり火のために、今夜の満月はむなしく中天にかがやいておるだけであった。

明日十六日には、大聖人さまを相手として諸宗の僧侶が、三昧堂の大庭において、佐渡の代官、本間六郎左衛門尉重連を仲介として、問答をしようと言うその前夜なのである。念仏宗はここ、禅宗はそこと、地割りをしたようなものの、結局は早い者勝ちなので、その前夜からつめかけて、以上のような大騒動となったのである。

ガヤガヤと、しゃべる言葉なまりも、越後、越中、奥州、信州、関東と大変なことである。信州弁ではアクツ、アツコ、越中越後ならキビス、キビシヨ、出羽の方ならばアクド、会津地方ならアグツに、アダト、これが全部関東弁で言うならば、カカト（踵）のことである。こんな調子だから、なにをしゃべっておるのか、よほど耳をすまさねば、各処の話はわかりかねるが、いずれも、明日の問答についての下馬評である。真言師は真言宗が勝つと言え、禅宗の僧侶は、勝者は禅宗であると言い、念仏も負けてはいず、これだけ集まったって、数の多いのは念仏だから、なにかの時に、日蓮法師をやつつけるのは、わが宗であると鼻いきがあらく、うかうかすると、大聖人と問答をする前に、お互い同志で問答をしかねまじき光景であった。

明日にそなえて、うとうとと眠る僧侶は、余程自信のある僧侶とみえ、なにかのきつかけで、日蓮法師を一言で、とつちめて、わが名をこの問答において、一躍上げてみようと思う、高名にあこがれた学僧であるかもしれない。

そう言った群の中で、ここは珍らしく一人の尼僧が、大声で立ったまま話をしておる。年配は五十すぎであろうか。かがり火にうつる尼僧の顔は、どうみても女とはうけとれぬ、おつかない顔である。話をする度にたった一本残った前歯がちらちらみえて、話にすごみを加えていた。聴き手は薪火にあたりながら二、三十人はいる。話と云うのは、尼僧が冥土から帰ってきたと言う話だから、聴き手が一生懸命になるのも無理がない。その尼僧は一度死んで、七日目に冥土から還ってきた。なぜかえってきたかと言うと、閻魔王の前までいったが、閻魔さんが、名前をまちがえていたことが、わかったので帰してくれたと云うのである。

「こんなに、坊主が沢山あつまつたって、冥土までいって、閻魔さんに逢ってきたのは、わたしだけなんだから、明日の日蓮法師との問答には是非とも、わたしも一枚加えて貰いたいものだと思っておるよ。いくら口達者な日蓮法師だって、冥土の話は出来まいからねえ」

「そうだ、そうだ、閻魔が塩からをなめた顔と言う言葉があるが、お前の御面相では、閻魔もあきれて、娑婆へかえしてくれたんだろう。どうだ」

わあっというわらい声があがった。

「機能がきは、その位にしておいて、閻魔がなんとか言ったと言う話を早くやれっ」

「今するよ……」

尼僧は、野次った人の顔をにくにくしそうに睨めつけながら、話を始めた。

「いいかねえ、冗談を言うのではないよ。本当に、仏法の話をするんだから、よく聞いて貰いたいよ。妾が閻魔の庁によび出されて、おしらべを受けた時、丁度、五人の坊主が閻魔さんに、しらべられていたんだ。一人は国は何処だが知らないが、槃若寺の道品という坊主だった。この坊主は、常に大涅槃經四十巻を誦讀致しておりましたと、言葉すくなくに申し上げたら、閻魔王は、よろしい極樂行きぢやとぼんと判子を押された。その次ぎはと閻魔が言うと、宝明寺の智生でございますと一人の坊主が進み出たら、汝か……汝は坐禪苦行の功があるぞ、極樂行きぢやとこれも又ぼんと判子を押した。次は融覚寺の最曇でございますが私は、生前中、涅槃經四十巻華嚴經六十巻を数千人の人に講義を致しましたと自慢げに申し出たのだ。そうしたら、その時、閻魔はなんと言ったと思う、皆の衆ようくきけよ」尼僧は得意げに、あたりを見廻して一寸言葉をきつた。

「いいかなあ、その時の閻魔の裁きはこうだった。汝はお経の講義をしたと言うな、だいそれた

ことをした者である。講義をするものは彼は秀ぐれておる、これは劣つておると言つて經文を比較するの罪におちいるのである。それに講義をしようと云う以上は、自分より聴き手は劣るものと考えやすく、己におごる心が出来るものである、今はただ坐禪と經文誦誦の時であつて、經文を講義するの時代ではないぞと言つた。あわてた最曇は、平身低頭の頭をあげて、「私は金持ちの家に生れた訳でもなく、まことに貧者の家に生まれまして、おごりたかぶるの心なぞ毛頭にございません。只生来學問がすきでございましたので、お経を講義しただけでございます」と言つたが「言訳はならんぞ……」と閻魔王が言つと、ばらばらつと、青鬼が十人程、とび出してきて、最曇をとりまくと、こつちだ、と最曇を迫いたてて、西北門の方に出て行つてしまつた。門のあく時に、ちらつとその方向をみたが、門も真黒なら家も真黒で余り好い処ではなきさうだつた。

お次ぎと言つと、私は禪林寺の道山でございます。私は沢山の檀家を教化し、等身大の仏像十体をこしらえて供養し、尚且つ一切経をこしらえた者でございます。これも自慢たらしく申上げると、閻魔さんは、帳面をくつた手をやすめて、道山ようきけよ。沙門と言つものは、常に心を一に摂して、仏道を守ることと坐禪經文誦誦が第一である。世間のことに心をつかうことなく、經文や仏像をこしらえることは一応正しいことではあるが、すでに仏像をつくるには、他人の財物をあてにしなげれば、僧侶の身では到底つくる事が出水ないであろう。物を得れば、必ずらむさぼるといふ心がおきる、むさぼる心とは即ち貪心である。貪心を生ずれば貪毒、瞋毒、

痴毒ちどくの三毒が必らず生ずる、三毒の生じたるものは、煩惱を具足して沙門にふさわしくないぞ、汝も更に糾明の要がある。閻府が語尾に力をいれて断定すると、青鬼めが再び十人程現われて、道山を黒門の方に引き立てていったが、道山は悲しい声をあげて、娑婆では、功德になるぞと思つてやったのに、ここでは話が違ふとは。情けなや、情けなや、黒門がしまつても、道山の叫び声がかこえていたのは本当に気の毒であつた。五人目の坊主は靈覚寺の宝明といたが、閻魔の前に出ると、大いばりなみえを切つて語りだした。私は坊主になる前は公卿でございました、いろいろな役にもつきましましたが、最後は若狭の国の国守になつた時、自分で靈覚寺を建立して僧侶になりました。急造の僧侶でございますから、経文誦誦と云うところでは、多少劣るかも知れませんが、仏様を札拝すると言ふことでは、決して人後に落ちるものでもございません、如何なものでしょうか……閻魔王は宝明と申す者、汝も愚かな者ぢや、ようくきけよ。汝は国守であつた時に如何なることをしたか、その浄玻璃の鏡にかけてみようか、如何じやと言へば、最初の勢は何処へやら、宝明は、ふるえながら消えいらんばかりに、地にうづくまつてしまつた。頭上に閻魔王の声が鳴りひびいていた。そうであるう。鏡にかける迄もない、汝が国守であつた時は、理をまげ法をまげ、あまつさえ民の財産を、さんざん横領したではないか、靈覚寺を建立したと言うが、それも汝の力ではなく、民百姓のものをかすめてつくつたものである。何んの功德があるろうぞ、汝は最早糾明の必要はない、早速に地獄ゆきじや、この言葉が終わらないうちに赤鬼

が、どやどやと大勢やってきてうずくまった宝明を、つまみあげると、さつきと黒門の方にひっぱって行ってしまった。どうじゃ、これが、わたしが七日間冥土にいつてきてみてきた話だ、本当の話だ、この閻魔のさばきでもわかるように、今は坐禪と経文読誦をしておれば救われる時代なのだ、それが、たった一人の日蓮法師を相手に、問答しようとして、この雪の国佐渡の島にこんな集まっておるとは、本当にばかばかしいことではないか、どうじゃ皆の衆……」冥土の話をすると言うので、長いこと静かにしていたが、冥土の話が終ると同時に急にガヤガヤし始めた。

「尼さん、尼さん……」

人の群れから声がかかった。

「なんだよ……」

尼が言うと、

「その閻魔さんと言うのは、何代目の閻魔さんだねえ」

とひやかした。

「閻魔に何代目なんかあるものか、閻魔は閻魔だよ……」

と言ったので、どつと笑い声が上った。

「閻魔は一人でいたか」

誰かが声をかけた。

「無論一人さ、わたしがいった時はねえ」

と尼が返答すると、

「玄応音義二十一という書物をみたことがあるか……」

「そんなむずかしい本はみたことがないよ。どうせわたしは無学の尼だからねえ」

「その本によると、閻魔とはくわしくは閻魔羅社と呼ぶのだ、閻魔とは二つということと羅社とは王ということだ。だから二王という意味だから二人いなければならぬ」

「一人は何処かに、遊びにいつていたのだ」とまぜかえしたので、どつと笑い声がどよめいた。

「真面目にこの尼さんに物を教えておるのだ、まぜつかえす奴があるか、二王は兄と妹ということになっておる。二人とも地獄の王であつて、兄は男の方を裁き、妹は女を裁くとある。お前は尼だから、羅社の方がさばくのであつて、閻魔がお前をさばくことはない筈だ。嘘を言つては、それこそ、舌をぬかれるぞ」

「嘘なんか、言うものか、だが、そんな偉らそうなことを言うなら、明日は一月十六日、なんの日か知つておるか、答えてみる」

尼僧は本当に怒つて、問い返した。

「一月十六日……一月十六日はだなあ……」

「ごまかすな、お前こそ何んにも知らないらしい、教えてやるから覚えておけ、正月の十六日と盆の十六日は、閻魔さんの命日の日だ、子供だって知っておる。貴様こそ、閻魔さまに舌をぬかれるぞ」

再び、どつとかがり火の火をあおるような嘲笑が起つた。

「日蓮には十王讚歎紗という著述があつて、中々閻魔の研究をやつており、自分もみてきたようなことが書いてあるから、尼さんの舌ぐらいでは、日蓮と問答は無理だよ……」

と別の杉の根もとがら声がかつた。

一寸静かになつたと思うと、禪坊主らしいのが、法衣の袖をまくりながら、大きな声で怒鳴つた。

「仏法出現以前の世相いかん……誰か答えてみよ……仏法出現以前の世相いかん」

このどなり声に、塚原の山野は人なきが如く、静かになつた。かがり火がもえきつたか、ぱあつと、火のこを散らしてふつと消えた。

なる程今夜は月夜だったのかと、お互いが気がつく程に、杉の木立をもれる、月の光りがあざやかに輝き渡つた時、突然でつかい声で返答があつた。

「天下泰平、天下泰平」

わおつと爆笑が起り、再び塚原の山野は以前にもまさる喧争の場所となつた。

丁度その頃、ここも塚原の一軒の大きな農家に、佐渡の有力な諸宗の僧侶が集って、明日の問答の準備に余念がなかった。念仏の唯阿弥陀仏を頭として、生論房、印性房、慈道房、道観房、慈観房等々が、板の間の炉辺を中心にして相談をしておった。

「鎌倉から極楽寺の院代善観上人の御着でございます」

土間から声が掛ると、一座はどよめき出して、奥の部屋に、あたふたと伝言するものがある。

「とうとう、問答に迄もちこしてしまつたのですか、不手際な話ですなあ」

院代の善観上人というのが、不機嫌な顔をしながら、二、三人のお伴をつれて家の土間に立つた。

一座の中で、それに返答をするものはいなかった。奥の部屋から、唯阿弥陀仏、生論房、印性房等々が、五、六人どやどやと出てくると、土間の善観上人に向つて叮重を極めた礼をして、「御上人さま、どうぞ、奥へお通り下さい、そこではお話も出来ません。この夜中の御着さぞ途中困難ごんなんございましたらう」

「途中の困難などどうでもよいですが、何故日蓮と問答なぞするようにしてしまつたのですか。極楽寺良観上人さまの御苦心は水の泡となりました。残念、残念、奥の部屋より、この炉辺の方

が結構です」

善観が炉辺に坐ってしまったので、首頭部の僧侶も仕方なく、その前にすわり、今迄、この部屋にいた僧侶は、あべこべに、奥の部屋へといつてしまった。

「問答ということになったところをみると、あの御教書は……」

善観は声をのかと、眼がおで、話しても大丈夫かと言うような様子をした。一座の人々は、互いに顔を見合せて、大丈夫でございますと、うなづくのであった。

「あの御教書は、ばれましたか」

「善観さま、残念ながらばれたのでございます」

生論房が答えた。

「余人がつくつたのならともかく、この佐渡の国の国主である、武蔵守宣時殿の御教書ではないですか、何故、ばれたのですか。この御教書を出すようにしたのは、良観上人さまの並々ならぬ御苦心のある所です。ばれたとあれば、良観上人さまのお顔にも、かかわることですからなあ」

善観が深刻な顔をするので、一座はしんとしずまってしまったのである。善観は言葉をつづけた。

「大体が、貴僧達も御承知の通り、この佐渡の島に流されて帰った人は一人もありません。順徳上皇さますら、この島に流がされては、佐渡の土となって相果て申した。日蓮が竜ノ口で斬首と

きまつていたのにもかかわらず、その刑をのがれたのは、御執権職時宗さまの御台所が御懐妊であつたからです。なにも日蓮なぞの法力なんぞによるものではありません。日蓮の仏力、法力で竜ノ口の難をのがれたと、近頃言いふらしておるようですが、まことに笑止千萬な話です。そのような彼等に都合のよい噂話を消すためにも、ここ、佐渡の島で、日蓮の首を切つて、仏敵を亡ぼされはなりません。そのための深謀遠慮な御教書であつたのですが……」

印性房が、思わず返答した。

「御言葉中甚だ失礼ですが、申し上げます。申し上げます」

「なんですか……」

印性房は、興奮のあまり、声を出してしまつたのだが、落着いてみると、自分が、善観に向かつて返答する資格のないのに気がついて、

「……、……」

だまつてしまつたのである。この時首領格である、唯阿弥陀仏が始めて口をきつた。唯阿弥陀仏というと、阿弥陀仏の次ぎぐらいに、えらそうにきこえるが、実はそんな意味ではなく、念仏を常に申しておりますと言う意味の名前であつて、学識の方ははなはだ、あやしい人物である。

「善観上人さま、実は、佐渡の念禅真言の僧侶も拱手傍観しておつた訳ではありません。この佐

渡の島こそ、仏敵日蓮を亡き者にする場所と考えまして、日夜努力しました。一滴の水一粒の米も、日蓮の喉を通すまいと思つて、四辺に警護をつけて充分の用心をしたのでございますが、不思議と日蓮は死にません。邪法をつかうと聞き込んでおりましたから、十日や二十日はさもあらんかと安心しておりますと、中々死にません。そこで、しらべてみますと、なんたることでありましょう。日蓮に食い物を、ひそかに運んでる奴がおるのでございます。そこで、面倒だ、遠矢にかけて射殺ろしてしまえと、或る日、強弓自慢の者をつかひまして、遠矢をかけたのでございますが、それがなんと、日蓮めにみつかりますと、高い杉の樹から堂とおちまして、介抱してくれたのが、敵の日蓮といったような調子でございました。そこで、武蔵守様の御教書をいただいたので、この機を逃がすなと、島の全部の僧侶は勿論、念禪真言の信徒二、三百人をひきつれて、代官本間六郎左衛門の屋敷につめがけまして、日蓮を早速殺せとつめよつたのでございますが、代官は言を左右にして応じません。大勢の力をもって代官をせめたてますと、六郎左衛門はならんと言うのでございます」

「何故、ならんと言うのですか」

善観の問いに答えて、

「代官はこう申しました。実は日蓮には、執権職時宗殿の副状が、この島にきた時からあるぞと申すのでござります。

大勢の人々が興奮のあまり、みせよ、みせよと叫びましたので、代官はついにその副状をもつてまいりました。この唯阿弥陀仏たしかに、わが眼をもつてみました……」

「なんと、書いてあったのですか……」

「それには「この人はとがなき人なり、今しばらくありて、ゆるさせ給うべし、あやまちしては後悔あるべし」とあつて、たしかに執権殿の書き判がございました」

「ううむ……」

善観は思わずうなつた。

「時宗殿の副状がある以上、たとえ武蔵守殿の御教書があつたとしても、勝手な処分は相なりませぬと、代官本間六郎左衛門が副状片手に叫びましたので、代官所におしかけた二、三百人の人間も、ついだまつてしまいました。六郎左衛門も利口な奴ゆえ、当方の武蔵守の御教書はみせよともなんとも言わなかつたので実は当方は助かりました。そして六郎左衛門めが最後につけ加えたのでございます。皆様方も、御僧侶は昔から問答と言うことがあつて、法の勝劣を決めると言うのではないか、問答によつて、日蓮を攻め落とすと言うならば、六郎左衛門も決して仲介をいやがるものではない。問答せられよ、問答せられよと叫びました。すると、つめかけた念禅真言の信徒が、そうだ、そうだと叫びましたので、ついに、日蓮と問答となつたのでございます」

善観も沈痛な顔をして、ついに一言も発することなく、事態の急をみとめざるを得なかつたの

である。

一一

文永九年一月十六日の朝がきた。

佐渡塚原の三昧堂の大庭である。

はためく幔幕の前に、本間六郎左衛門とその兄久経の二人が一族郎党を引きつれて床几に厳然と腰かけている。後年人々が天下三問答の一つと名をつけた、この塚原問答の本日の仲介をかつて出た訳である。六郎左衛門としては、法門の勝敗を決定する役柄とは毛頭思つてはいない。むしろ自分も念仏宗の信徒であつてみれば、本日の問答は念仏の僧侶に勝たせたい。又勝つものと思つていた。だが、念仏の僧侶が問答に勝つたとしたら、どうなるだろう。恐らく、三百人の聴衆の怒りは、よもや日蓮を生かしてはおくまい。六郎左衛門の眼前で、日蓮はなぶり殺しになるだろう。

それを代官としては恐れたのである。

守護所に数百人が押しよせて、日蓮を殺せ、日蓮を殺せ、罪があろうがなからうが、この佐渡の島に流がされて、最後まで生かしておいた、ためしはないではないか。頸をはねろ、そつ首ひ

つこぬけと叫んだ時に、六郎左衛門は

「時宗殿より日蓮を殺してはならぬという副状があるぞ」

と叫んで、本日この問答にもちこんだ、六郎左衛門であったのだ。だから、六郎左衛門は、問答に負けた場合の大聖人の処置を考えて、警備を厳重にしていたのである。

大聖人は如何かとみれば、そまつな筵の上の敷皮に、どつしりと座をしめて、仏像の如く静かであった。この大聖人を取りまいて唯阿弥陀仏（これは常に南無阿弥陀仏を唱えておる人の意味である）生論房（律宗）印性房、慈道房、道観房、等々の僧侶がならび、その外輪に、越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々からあつまつた法師達が、怒りの眼をきらきらさせており、その周囲の杉木立の中には、百姓やら、にわかじたての僧侶や、金剛杖をかまえた修験道のものもいた。最初から問答は無用、日蓮を打ち殺すものは、我が修験道なりと構えて、口の中でぶつぶつと言っておるのは、さしずめ大聖人をしてへいこうせしめようという、答力欠失の呪文を唱えて祈禱しておるのである。

その数ざあつと三、四百人が大聖人さまを中心にして、一問一答、或いは問答をどんどんとしかけていって、返答をさせる隙はもたせず、たとえ一句なりとも詰つたならば、勝つた勝つたと、凱歌をあげて、そのどさくさにまぎれて打ち殺してしまえというのが、この場所には、今は顔を出してはおらぬが、昨夜、急をきいて鎌倉から、塚原にかけつけて、背後でみんなをあやつる極楽

寺良観上人の院代をつとめる善観の策略であった。

時刻はせまった。

佐渡代官職本間六郎左衛門重連が、扇子をきつと右手であげると、背後の武士が、

「佐渡配流の日蓮と、諸宗諸派大徳方々の問答を只今より許すの儀、代官職よりお許しが下され
ました……」

塚原の山野にこだまする程の大きな声であった。

わあつという喊声があがり、その声のひびきで杉木立の枝の雪が一勢におち始めたので、そこ
ここに、どよめきが起り、筵にあぐらをかいていた、諸大徳と言われた、僧侶達は落ちてくる雪
に悲鳴をあげて、全部がたちあがってしまった。

「すわれ、すわれ」

「みえないぞ、雪がおちてきた位で騒ぐ奴があるか、前がみえないぞ」
と、どなるやら、

「問答がみえない、すわれ、すわれ」

「馬鹿、問答はみるものではない、きくものじゃ、あほらしい……」

「みるも、聞くもあるもんか、まだ一向に始まった訳ではないぞ、おちつけ、前はともかくすわ
れ、諸人の迷惑だ……」

てんで、てんでのことを、どなつて、暫く騒然としたが、やがて、嘘のような静けさがおとずれて、頭上を吹く松籟の音がさあつとすぎてゆくだけであつた。

大聖人は依然として黙しておる。

六郎左衛門兄弟も沈黙のままである。

そして塚原の山野にあつまつた、三、四百人の人も黙然として、すぎゆく風の音に耳をすました。

これは、誰が第一番の口をきるかと言うことの期待をかけられての沈黙であつた。

六郎左衛門が、しびれをきらして、扇子を上げようとした時である。

「日蓮坊……」

と声をかけて、僧侶がどなつた。

「貴僧は、念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊と常に言われるそうだが、それは本当のことか、もし本当だとすればいずれの経文にそのような、馬鹿げたことが書いてあるか、返答をせよ……」

大聖人は依然として口を即座に開かなかつた。返答をしたのは外の僧侶だつた。

「日蓮坊その返答は暫くまで、只今の質問者は、自分の姓名をも言わず、問答をしかけようとしている、そんな作法知らずに、日蓮坊が返答する筈がないわ、問答をいどむものはすべからく、所屬の宗派を先ず名のれ、この大勢の中には、寺ももない貧僧もおろうがそれにしても、宗派と姓名は名のれ、そして住職ならば、寺名も名のれ……」

「ついでに僧位も名のれだろ……」

弥次が、とんだので、わあつと笑い声があがった。

「笑いごとではない、僧位を名乗るのが本式だ、貴公等は問答の法式を知らんなあ」

と怒鳴りながら、あたりをみまわすと、西の群れの中からすわったまま声がかかった。

「おい、そう言う貴公こそ、宗派も宗旨も、どこの住職だかも名のらんではないか、自語相違というのが仏語にあるが、貴僧知っておるのか、こんな所で、自己の姓名所属宗派僧位住職など、なんで名乗る必要がある、殿中においてする問答ならまだしも、ここは塚原の山野ではないか、正式の問答の形式なぞなんているものか、先程、問答開始の時の、代官殿の家来のこと忘れていたのではないか、佐渡配流の日蓮と、諸宗諸派の大徳の方々との問答云々と言われたではないか、日蓮は、お上よりお咎の流人の身であるぞ、これと問答するなどは、実はもつての外で、口をきくも我身が汚されると思っておる程じゃ」

「そんな考えなら、なんでやってきたのだ」

「わしはただ見物にきただけじゃ」

「見物にきただけなら、閉口して見物しておれ」

「そうだそうだ」

と同ずるものと、

「何処の僧侶か、知らないが、先程の僧侶が言われたことは正しいぞ、ここは殿中ではない形式はいらない、姓名なぞ名乗る必要なぞあるものか」

「そうだそうだ、姓名も宗派も宗旨も名乗る必要なぞあるものか、日蓮に勝った時はよいだろうが、負けた時は、後代まで、名がのこるからなあ、まあこういった処がずぼしではないかなあはつはつはつ……ア」

この一言の刃物のような声は、すみ渡つてきこえ、一寸塚原の山野も静かになった趣きがあった。

業をにやした、本間六郎左衛門が、

「各自各手の問答は、始まったが、日蓮法師との問答は一向にないのが如何なものか、さあさあ問答つかまつたら如何じゃ……」

と言い放った。

この時、間はつをいれず大聖人は言われた。

「各々方々には、遠く、奥州、出羽、越中、越後、信濃の国々より、本日、日蓮房に、お教えをたれようとしておでかけ下さった方々であります。昔帝釈天王は野干を拝して仏の教をきいたということも仏説にございます。法によつて人によらざれ、本日、日蓮は教示を賜わる側にあります。しかれば、宗派宗旨、僧位、尊名を名のる必要はございません。御自由に御教示を賜わりたく思います。また、日蓮も答えると同様に、皆様方に質問して教示を賜わりますよう、では」

大聖人が辞をひくくして、一膝のりだと、不思議や三、四百人の人々が、すこしづつ膝をうしろに引く音が、ざあつざあつときこえるのであつた。

「禅宗の僧、教示を願う、禅天魔とはいずれの経文にありや」

「汝、禅宗ならば、何故、禅天魔の所在の経文をたずねるか」

「何故の反詰ぞ、直ちに経文をあげよ」

「禅は一切の経文を、はきたるつばきと言ひ、月をさす指となして、天地日月等も汝等が妄心よりいでありと言つて経文を笑うに、汝その経文に天魔の所在をたずねるは、禅宗にして禅宗を知らざるの輩なり、いかん」

「……………」

一人沈黙してすわると、一人がたつた。

「日蓮坊主ようくきけ、仏説大梵天王問仏決疑經に「我れに正法眼藏の涅槃妙文実相無相微妙の

法門あり教外に別に伝う。文字を立てず、摩訶迦葉に付属す」とあって、迦葉にこの禪の二法を教外に伝う、故に、仏の経経は月をさす指、月をみては、後は不用のものなり、心の本分禪の二理を知って、後は仏教に心をとむべきの用なし、されば、我が禪の先哲は、十二部経はすべて是れ閑文字とたつなり」

「禪に三種類あるを知って、汝、日蓮に問うか否や……」

即答はなかつたが、大聖人はすぐと言葉をつづけた。恥をかかせたくなかつたのだろう。

「如来禪、教禪、祖師禪である。汝が今富う所は祖師禪であるが、教外別伝きょうがいべつでんと言つて、教をはなれて之れを伝うといわば、教をはなれて理なく、理をはなれて教はなき道理。教とは全く理ということの道理を汝は知らざるものである。釈尊金棺こんかんより、拈華微笑ねんげみしょうして迦葉に付属し給うと言ふも是れ教ではないか。文字を立てずという四字も即ち教であり文字である。汝は汝が師匠に一言も問わずして今日の僧となりたるか、汝が師匠は一冊の書籍も汝にあたえずして仏教を習えと教えたるか、如何、返答あれ」

これには、さすがに返答がなく、人ごみの中に、すばやくすわると、その影をかくした。三、四百人も、とりかこんだ中から、誰れでもきやすく問うことが出来るので、そろそろと活気を呈してきた。

「日蓮、御坊、禪天魔とは経文のいずれにあるやと、最初の問者が、問うたのに、何故経文をあげずして、うまく問をのがれたのか、拙僧は貴殿が、卒直にその所在をあげてくれればよいのだ、そしたら、本日只今より禪宗の数珠をきつてもよいのだ。経文をあげられい、経文をあげられい」問者の真面目さが、塚原の大庭を圧して、ちよつとしまつた気配であつた。

「日蓮が、禪は天魔の説と云うのは日蓮が言葉ではありませんぞ、仏の御遺言に「我が経の外に正法ありと云うは、天魔の説なり」とあるから申しておるのであります……達磨大師が印度より唐土にきて、四卷の楞伽經りょうがを第二祖たる慧可にさずけて、我れ唐土の国をみるに、この経よりすぐれたる経一卷もなし、汝たちちて修行して仏になれと教えたりと、慧可禪師の伝記にあるではないか、されば、達磨も慧可も、すでに経文をさきにしておるではないか、もし経によると言うならば、その経文は、大乘教か小乗教か權教か、実教か、教の勝劣を弁別すべきではないか、達磨が西よりきて、人の心をさして仏なりと言つたことに、禪宗の諸僧はひどく感心しておられるが、これ程の理屈は、華嚴、大集、般若、等々の法華經以前の權大乘の経にはざらにあることで、なんらめずらしいことではないわ、禪宗が楞伽經、首楞嚴經、金剛般若經を依り所の経文としておるのは、教外別伝、不立文字と自語相違ではないか」

禪宗の僧侶達は、なにをほざく日蓮坊とか、配流悪僧の駄弁、警策をもつて、叩き殺せと叫び

つづけたが、なんとか名のある禅僧であろう。

「各々、悪罵をつつしまれたい、禅徒の恥ではないか」
と両手をあげて、大勢の喧噪をしずめて、

「では、日蓮法師、これは禅家の公案であつて、質問するも、あんまり身勝手と思うが、答えられたら、答えてみられい、決して勝負をきそふと思う質問ではないが」

大聖人は静かに、微笑をうかべて答えるのであつた。

「松に藤かかる、松枯れ藤枯れて後如何」 (註一)

「上らずして一打」

「……」

ううむと言う呻り声が、塚原の大庭の禅宗の僧侶の口々から上つた。奇問をもつて奇襲したつもりが、みごとに破れたのである。念仏や、真言の僧侶たちは禅宗の僧侶が思わず、うーむとうなると、これは暗黙のうちに、負けたと考えたので、凱歌こそあげないが、いざまだと言わんばかりの表情であつた。だが禅宗の負けたのはよいが、こんどは拝聴ばかりしておれない。いよいよ自分達が質問しなければならぬので、一寸容易ならんぞと言う心持ちが、禅宗以外の諸宗諸派の人々の顔にみえていた。

そうした沈黙は大聖人の言葉で破られた。

「只今の公案の御返答は、禪家では満点の返答であろうが、それが、満点の返答だからこそ禪は天魔といわれるのである。釈尊が八十歳にて涅槃に入った時、沢山の外道や天魔がよろこんだと言うが、それにも似たのが禪家である。なぜなれば、禪宗は滅度の仏をみるが故に、松枯れ藤かれるなぞと言うのである。法華経の仏とは、寿命無量常住不滅の仏であり、この娑婆世界に常に住して法を説く、不滅の仏である。法華経には「この法法位に住して、世間の相常住なり」とある。禪宗は仏を滅度したとみる、外道の無に見いだすものである。だからこそ、一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月影をとるにいたりなぞ言うのである。而して禪僧等が、天魔の言にまどわされて、今鎌倉では武士の間に禪が流行しておると言うが、その実体を卒直に話してみると、禪宗の禪を、禪ふんどしとよんで、ふんどし宗と考かえておる輩が大勢おるわ……」

思わずわあつと言う笑い声が、塚原の山野を動かし、代官職の六郎左衛門兄弟すら、いかめしい顔を忘れて笑い出すしまつであつた。

すると、聴衆から野次がはいった。

「禪僧の高僧達が本来無一物なぞと、教えるので、裸体になつて修行しなければならんと考えたりしておるが、どうしても無一物になれないで、こまるものが、でんとついておるんで大弱りの態という処だ」

わあつという、前にもました笑い声がおこつた。

「そうだ、そうだ、その一物がとれたら、たいした悟りを得られるだろうが、名僧智識でも、これだけは御勘弁下さいの大切な珍宝だ……」

笑い声がまたわあつとあがった。大聖人は言葉をつづけた。

「……或いはまた、禪の宇を単衣即ちひとえものとよんで、嚴寒にも、着物をきずにふるえておるのが禪宗だと考えておるのがたんとあるのも気の毒だ、臘八の摂心（註二）にいつてみよ、単衣ものを着て、松樹の上でふるえておるのが禪宗だと思っておるのが、今鎌倉で流行の武士の禪宗というものだ。天魔の言葉のみいりしかとは、このことを言うのだと申してもさしつかえがないわ……」

禪宗の僧侶は、大聖人の言葉をさえぎる勇氣を失っていた。

「真言の僧侶、真観、出羽の国の住人、日蓮坊に問う、御坊は真言亡国というが、由来天子真言公卿天台と言われるくらい、天子の帰依ふかき我が真言宗をば、なんの証拠あつて、真言亡国と称するか、返答せられよ、あれにおける修験道の人々は、問答は最初から無益のこと、代官殿が言う時宗殿の下知状なども、この辺国佐渡では、通用するものか、斬つてすてよと言うのであるが、先ず、先ず、先ずと拙僧がとりなしての問答、心して御返答を受け賜りたい……」

この声をきくと、三、四十人の修験道の連中が、一勢に法螺貝を、ふうつぶうつぶうつとふき始めたので、その音のうるさいこと……

「法螺貝をやめい、法螺をやめい」

六郎左衛門の家来達が、法螺貝にまけないくらいの大声でどなったのだ。

「法螺をやめい大法螺をやめい、調子のよい本当の言い草だ」

座中の人々も口ずさみながら笑い始めた。

ところが、修験道の連中は、そんな制止なぞの声には、とんちやくなく、益々法螺貝をふきつづけるのであった。

真観が、何やら念珠をもんでさあつと伸し、さつととじたりすると、ぴたりとその修験道の法螺貝はやんだ。

「日蓮坊、只今の法螺貝は、せめて配流の御坊と問答する拙僧の法のためじゃ。汝が常に口にする法華経の序品に「大法螺を吹いて大法鼓をうつ」とあるではないか、さあさあ、真言亡国の現証を出されよ」

「真観房とか、言われたなあ、その真言亡国の証拠は、御房そなたの顔を南にむけてみられるがよい、それで充分にわかる筈じゃ」と言われた。

「……」

真観房の奴、全くその瞬間あつげらんとしたのだから面白かった。

「御房はこの佐渡の国には、始めてまいったのですか」

大聖人はやさしく問われた。

「勿論、流人の配流される、このいまわしき佐渡の島に、なんて従前こよう筈があるうか、始めてじゃ、真言を亡国の教えと称して、この佐渡島にながされた、貴様のことをきき、斬り殺す前に、問答を許すときいたので、噫呼、世にも、哀れな僧侶もおるもの、同じ仏道を志しながら、自ら、配流の身を恥じようともせず、おこがましくも諸宗と問答をするという。出来ることなら、真言秘密の法をもつて、汝日蓮の病悩を救わんものと思つてはるばると、出羽の国から、この佐渡の国に、始めて来島いたしましたまで……」

「始めてこられたのでは是非もないが、御房、日蓮が言葉をきいて南の方をむいて、懺悔滅罪の合掌をなされよ、ここより北方黒木御所にこそ、真言亡国の現証がまざまざとあるのを御存知ないのか」

「真観、この佐渡の島には、始めてじゃ、今御房の言う如く、本当に亡国の現証あるならば、この真観、真言をすててもよいが、返答如何んでは、そなたの首はないものとおもってもらいた
い」

「人皇八十四代、順徳天皇の御陵はいずこにあるのか、真観房殿は忘れたものとみえる。

この佐渡国の配流の生活二十二年にして、何故順徳帝はこの佐渡の土となられたかを御存知ないとも見える。今を去る五十三年の承久三年に、何故、三上皇は、臣下よりこの島に遠流せられたかを、真観房殿は考えたことがあるか。これひとえに真言の邪法の故である。そもそも人王八十二代隠岐の法皇は、承久三年五月十五日、伊賀太郎判官光季を討つて、鎌倉の北条義時を打つ血祭りとなし給い、六月八日に日本国に仏法渡りていまだ、二度までは行なわぬという、十五壇の真言の秘法を修法した。十五壇の法とは、一字金輪、四天王、不動、大威徳、転輪、如意輪、毘沙門、愛染王、仏眼、六字、金剛童子、尊星王、大元、守護経等の大法にして、この法の目的とする所は、王国国敵となるものを降伏して、命を召しとつてその魂を、密厳浄土へおとすという法である。これを行ずる人は、天台の座主慈円、東寺御室、三井の常住院の僧正等四十一人、ならびに伴僧等は三百人であった。しかるにどうか大願成就の七日目の六月十四日に、関東の軍勢は、宇治勢多を押し渡つて京に入り、三人の帝王は生けどりとなり、宮中に火を放たれて九重は灰燼となり、三帝は三国に流罪と決定した。その一帝は、この佐渡の島に相果て申したではないか、これすべて真言十五壇の秘法のとがによるものである……」

この事実^に抗弁する人は一人もなく、大聖人の声は、塚原の大庭を圧してなおもつづくのであった。

(註一) 松枯れ藤枯る云々。松を釈尊に藤は經文にたとえる。釈迦が死んだと言うことにこだわる、小乗の教

(註二) 臘八の摂心―十二月八日を言う、釈尊の成道した日で、一日から八日間、摂心即ち坐禪を昼夜屋外にてくみ、八日の暁方出山の釈迦像の前に大悲呪を誦する。

三

承久の乱の歴史的事実をあげての、真言破折には、真観も口のききようがなかった。

だが、真観は口をふさがなかった。

「日蓮坊、承久の乱の事実は肯定しよう、だが、すべて戦さは時の運というもの、たとえ五戒十善の君と仰がれる帝王たりといえども、いくさは、いくさだ。勝敗は時の運にしたがうの外はない。いくさなぞは帝王の起こすものではなく、すべて側近の輩が企てるものである。帝王は雲の上にあつて「大君は神にしあらば、いかすもの雲の上に庵ますかな」と万葉の昔からある。俗事にかかわるが故に、そのような結果となつたのであつて、それがなんで、真言の秘法をきずつけようか。そもそも真言にて仰ぐ所の大日如来とは、マカビルシヤナといい、マカとは日本語で大を意味しビルシヤナとは日の別名なれば、大日と訳す。或いは別名にビルシナとは光明遍照の義

で、（んしやう）遍照如来とも称す。日蓮坊、この塚原の山野の杉木立。松の大木をみよ、すべてこれ、日の当たる裏側には影がある。それよりも、汝が座せる、筵の上には、汝の影がある、今我が、真言にて言う所の大日とは、そのような影のある所の日ではない。外を照らせば、内に及ばずという日ではない、我が仰ぐ太陽は、唯昼ありて夜はともさず、斯くの如きものは劣にして、大日如来の日光は、一切にあまねいて、内外昼夜の別はない、故に最高頭最広眼蔵如来と号するのである……」

真観が、大日如来の功德の話をつづけておると、大聖人の声が、それをとどめた。

「真観殿、真観殿、日蓮はもともと真言宗の僧として、出家得度いたしましたもの、そのようなことは充分存知しております。では、真観殿に伺うが、大日如来の御両親は、どう言うお方で、なんという御名前でしょうか、一つおきかせを願いたい……」

「大日如来の御両親の姓名とは……」

「左様、伺いたいものでございます。ついでに、御両親がわかれば、生れた処も伺いたいものでございませう」

「生れた処……」

「さよう、そして生れた処がわかれば、死んだ処も伺いたいものでございます」

「汝日蓮、汝は自分の口から、たったの今、自分も真言宗の僧として出家されたと言われたでは

ないか、真言宗の僧ならば、そのようなことは、とつくに承知の筈である、馬鹿馬鹿しい……」

「真観房殿、日蓮は、たしかに、大日如来の父母右、生ぜし所も死んだ所も、全く知りません、是非是非御教示を願いたいと存じます」

「日蓮坊、汝は諸宗を悪罵破折するの僧と言うから、少しは経文を学んだかと思つたら、みると、きくとは大違いであつた。そもそも大日如来の父母生死を問うとは、ただ、驚きいった俗物だ、そもそも大日如来は無始無終の色心にして、なんで父母両親や生死の場所なぞあるうか、よく考えてもみよ……」

「これは驚くことをきくものかな、なにも大日如来にかぎらず、我等一切衆生も、蟻も蚊も、おけらもあぶも、みな無始無終の色心である、衆生において、有始有終と思うは外道の僻見と言うものである。大日如来の父母生死の場所は如何かと伺つておるので、法身論を伺つておるのではありませんぞ」

意表をつかれた大聖人の質問に、真観もさすがに口をつぐんだ。塚原の大庭の群衆もざわざわと、風にうごく、雑草の如く、うごき始めていた。

「真観殿、御返答なければ、日蓮、更に伺いたいことがある」

大聖人は、真観を更に追求した。大勢の人数の中にすわりこんで、身をかくそうとした真観は、それも出来ず、啞然としたような姿で、つたつたままであつた。

「大日如来は如何なる仏説にあるかを問いもうそう……」

この質問をきくと、硬直した、真観の顔が、にわかに笑顔になって、早速に返答した。

「今更、日蓮坊が、そのようなことを質問するとはちと解せぬことであるが、この塚原の大庭にあつまった、諸宗の人々に、教えるつもりで答えよう。そもそも大日経とは、つぶさに言う時は、大ビルシヤナ成仏神変加持経と称して、全七巻あつて、大日如来の説法を金剛薩埵こんごうさつたの結集せるものにて、永く南天竺の鉄塔中におさめられしを竜妙菩薩これを流布せりとも、一説には北天竺の石室に蔵せられしを、大猿が弘伝したとも称する……」

「真観坊どの、それほど言われるが、その大日経は、そもそもどなたがとかれたのか伺いたい」

「されば、大日如来が、説かれたと申したではないか……」

「されば、その大日如来がおられると言うことは、どなたが、言われたかと、この日蓮は何つておるのでござ」

真観坊は、さすがに口をつむった。

「大日如来がおられると言うことを説かれた大日経は、釈尊がとかれたお経ではなかつたか。大日経には、我昔道場に坐してこれをとくとある、我とは勿論、釈迦牟尼仏たることは明白である。されば、大日経は新訳の経にして唐の玄宗皇帝の御時、開元四年に、天竺の善無畏ぜんむゐ三蔵が支那にもつてこられた経であり、法華経はそれより三百年前の後秦ごしんの時代に羅什三蔵が支那にもつ

てこられたものである。法華經が支那に渡つてから後百余年をへて、天台大師は五時四教をたてて、従来、五百余年の仏教の學者の教相を破り、一念三千の法門をさとつて、法華經の道理をたてたのである。真言宗の名は印度にはないものを、善無畏が支那にて、勝手に真言宗と称したと思うものである。しかも、善無畏は、法華經と大日經との勝劣を判じて、大日經は法華經よりすぐれたりと勝手にたてたのである。何故かと言うに、印と真言とがない故に法華經は劣れりとたてた。およそこれ程、馬鹿馬鹿しいことがあるうか、それぞれ、真觀殿、お手前は、今盛んに、その法衣ころもの袖そでの裏で、印を結んでおられるが、この日蓮はこの通り、問答つかまつて、一向つうように痛痒を感じぬではないか……」

みやぶられたかと、真觀はさすがに赤面したが、もはや、大衆の中に立つて問答をする勇氣もなくなつたとみえて、くずれるようにすわりこんでしまったのも哀れであつた。大聖人の声は、三、四百人の人がおるとは思えないような、静けさの中であつた。

「印と申すは手のはたらきである。手が仏にならなければ、なんの役にたとうか、真言と言うのは口のはたらきである。口が仏にならなければ、その真言はなんの役にたつことが出来ようか、印と真言とを役立てようと思えば、先ず、仏になるべきことが肝要であると言わねばならない。無量むりょうう却千二百余仏の、印と真言を行じて、仏にはなることが出来るものではない、然るに、法華經には、二乗にじようさふ作つく仏おんじつ久遠きうえん実成じつじよう（註一）と申す法門があつて、法華經以前の四十余年の経々

には、二乗は敗種はいしゆの人ときらわれておるが、法華經にてはこれを破して二乗の作仏をのべておる。法華經にはもう一つ、久遠実成ということがあって、釈尊の始成正覺（註二）を打ち破つて、久遠の本地を開顕せられておる、二乗作仏久遠実成と、印と真言とをならべて比較するなれば、天地の勝劣と申されなければならない。久遠実成こそ、全仏教の根本中心の法門であつて、法華經以外には成仏を談ずるの經文はない。故に、釈尊も法華經の開經たる、無量義經において、四十余年には未だ真実をあらわさずと言われておるのである。然るに、弘法大師は去る、弘仁十四年正月十九日に、真言第一、華嚴第二、法華第三、法華經は戲論の法、無明の辺域（註三）天台宗は盗人なりなど申す書を、嵯峨皇帝に申し奉つて、俱舎、成実、法相、三論、華嚴、律、天台の七宗は方便の教であり、真言宗こそ真実なりと帝王に申しあげた。その功によつて、嵯峨天皇より、空海は東寺を賜わり、天皇は空海より灌頂を受けておるではないか……」

さあさあ大変なことになった。真言宗以外の律、華嚴、天台、等々の宗々の僧侶は、「わあわあ」という、どよめきを表わした。

「本当のことか……」

「でたらめだ」

「我々が、合同をして、日蓮を破ぶらんとする作戦をみぬいた日蓮坊主が、奸策かんさくだ、騒ぐではない。日蓮の作戦にのつてはならぬぞ、しずまれ、しずまれ」

と大入道の坊主が立ち上つてどなった。大入道が叫んでる時に、僧侶ではない俗人が立ち上つて叫びつづけた。

「……だが然し、弘仁十四年正月嵯峨帝より我が祖弘法大師が、東寺を賜り、皇帝自から灌頂をうけたのは、歴史に現われた事実ではないか、歴史の事実は、誰がなんと言つても否定することは出来ぬ、日蓮坊主がいったことは本当だ、さればこそ、我が祖、弘法大師は滅後八十七年にして、弘法大師と帝王よりおくられた、日本における大師号の第一番者だ、だからこそ、大師と言えば、弘法大師をさすくらい尊いお方である。ただ、日蓮が嵯峨帝をだましたようなことを言うたのは、実もつてけしからんが、わがみるところでは、真言宗以外の七宗と、それを加えて、近頃流行の念仏宗などは、全く話にならぬ、御宗旨だと断言してかまうもんか」

叫ぶと、その俗人は早速に人なかに身をかくしてしまった。怒つたのは、念仏宗の連中であつた。七宗の中には、念仏は数えられていないから、それみたことかと、得意がついていたところ、僧侶でもない俗人に、念仏の悪口を言われたのだからだまっておるわけにはいかない。

「今、念仏の悪口を言うのは、どいつだ、何処に、まぎれこんだ、出てこい、出てこねばこつちから、さがしにゆくぞ」

と二十名ぐらいの念仏僧が、勢いこんで、立ち上り、彼の俗人の、ひそんだあたりをさがし出すという騒ぎが起つた。

「私の乱暴狼籍は厳として許すこと相ならぬと、御代官職より御言葉がありましたぞ、乱暴いたしたものは、問答の敗者なりとみとめて、即刻この場より、御退場を願います。いな、即刻退散さしてみせませうぞ」

退散させると言うのだから、塚原の群集も静肅ならざるを得なかつた。

しかし、大聖人が言われた、空海が嵯峨天皇をだまして、七宗より真言宗がすぐれたりと断言したこの言葉は、共同一致して、釈尊の御名をもつて大聖人をせめようとした、この塚原の山野にあつまつた、邪宗群の歩調を乱すには十分に役立つたと言つてよかつた。

質問が一寸とぎれたので、大聖人は自ら口をきられた。

「各々方、暫く日蓮の言葉に耳を傾むけていただきたい。叡山に総持院を建立して、第三の座主となつた慈覚大師は、法華経と大日経との勝劣を判ずるために、七日七夜、堂にこもつて、いづれが、仏智にかなうや、否やを祈願したところ、五日目の五更（現今の午前四時より六時迄の間）に、日輪を射て動転せしむとの夢をみて、大日経こそ仏智に従うの経文なりと確信してこれを弘むと言うのである。よく日蓮の言かれる所に耳をかたむけて貰いたい、およそ、内典五千七千外典三千余巻に、日輪を射るとゆめにみて吉夢となすことは何処にもない。我が日の本の国

にとつては、これはもつとも忌むべき夢である。神をば天照といい国をば日本という。又教主釈尊の母は、日をはらむと夢みて釈尊を生んだが故に、教主釈尊を日種とも申す別名もある。殷の紂王は日天を的にして身を亡し、神武天皇の御時、どみのおさと、いつせの命みことと合戦のさい、命の手に矢がたつ、命みことの云く、我はこれ日天の子孫なり、日に向つて弓をひく、故に我が軍に利あらずと言われ、次ぎには、日を背にして合戦せられた故事がある。故に大日経の仏智にかなわざることは、慈覚の夢をみてもわかることである。真言亡国の現証は先刻のべるところであり、真言が、何故亡国の教えであるかは、教理文証をもつて答えたが、まだまだ不信の由あらばなんなりと問うてみられたらよい、決して返答を惜しむものでは少しもないぞ」

「印性房というものが、日蓮坊、貴公六即ということを知つておられるか」
ぼつんと、ぶつきらぼうに、大聖人に問うものが出てきた。

「六即を貴公問われるか」

「左様、六即とはいずれの経文にあるか、その出所を問うておるのだ」

大聖人は、印性房の質問をきくと、

「わあっはっはっ……………」

と六尺三寸の体軀をふるわせて大笑いに笑うのであった。

印性坊は怒った口調でつづけた。

「日蓮坊わしの質問が、何故おかしい。そのカンラカンラのにせ豪傑僧の笑い声なぞにこの印性房が、ごまかせるとでも思っておるのか」

「いやいや、これは失礼した。本気で御質問の模様なので、失笑したのを許していただきたい。六即とは、経文にはない言葉でございますぞ」

「なに、経文にはない、そんな不都合なことがあるう筈がない。曇鸞、道緯、善導、法然等々の諸上人が、度々言われておる言葉である、又その配立を伺いたいものでござる」

あさはかな印性房は、次ぎの大聖人さまの返答も知らず、問答に最早勝つたような豪然たる態度に変つて、周囲の僧侶を見廻わしたものであった。

「いくたび問われようが、六即の配立（註四）は阿弥陀経にも、六万巻の経文にも、印性房ないのじゃ、ないのじゃ、分つたか」

「でも、鸞綽導然の諸上人は度々たびたび……」

「度々引用せられようともないというたらないのだ。実はなあ、六即とは天台大師が言い出された言葉だから、経文にはないと言うのだ、天台大師がはじめて法華経の円位から、建立した修行の次第というのが六即だ、わかつたかなあ」

「曇鸞、道緯、善導、法然等々の諸上人が、所立ではないと申しても、その義を常に引用せられておるならば、立てたも同然ではないか……」

「左様かなあ、日蓮は、昨年の十一月より、この佐渡の島にながされておる故、六即が阿弥陀経に立つる所の法門と変ったことは知り申さなかつたなあ、これも、都をはなれての流罪の身故の悲しさであろうか、天台大師も御自分が初めて建立された六即の法門を阿弥陀経にとられ申されたか、いやはやでござる……」

大聖人の呵々大笑は満座を庄して、何人なんびとの口もひらかなかつた。

「法華経の三の卷迄に、女という字、いくつありや、日蓮房答えてみよ」

これはまた変った質問で、しかも男ではなくて尼僧であつた。顔を蒼白にして、ヒステリックな声で問うのであつた。

「一〇」

大聖人は答えた。

「何処どこにありや」

「化城諭品第七に「男女皆充滿せり」とあるのが、それである」

「たつた一字しかないのか」

「左様三の卷迄と言われたから一つと答えたが、女人成仏を説かれた、提婆品には十三あり、開

経たる、無量義経には十四文字ある。汝はそのようなことを、この日蓮に問うて、何んの必要があるうか、恐らく、汝はたつた今、日蓮に問を發した印性房が、かくし妻であるうが、日蓮たしかに、その証拠を汝の如是相にみた」

かく言われた尼僧は、蒼白の面を急に真赤にすると、頭巾をもつて、面をかくすが早いか、女の脚とは思えぬ程の早さで、塚原の大庭から逃げだしていった。

「みたか、印性房のだいこくを」

「みたみた。まじめくさつた印性房が、あんな比丘尼を抱いておつたのか、畜生」

「さすがは印性房の妻女じゃ、夫の敵とばかりに、日蓮坊に問答をしかけたのは、そこいらの、弥次馬坊主とは、信心が違うは、みあげたものじゃ、ほめてよい。印性房はよい妻女をもつたものだ」

と弁護するもの、弥次る者、各人各説であつた。そして、ほめられた、印性房はとさがしてみると、その騒ぎにまぎれて、これも塚原の大庭から影をかくしていた。

「印性房がおらんぞ、してみると、今の日蓮坊主の言葉は本当かも知れないぞ」

「仕方がない、大勢あつまればそんな者もくるものじゃ、だが、日蓮、汝は如何なる証拠をもつて、そのような人身攻撃をしたのか伺おうではないか、いやしくも、ここは法論の場所、可哀想な尼僧に恥をかかすとは、慈悲もない処置ではないか」

「彼の尼僧は、真面目にこの日蓮に問答をしかけたのではないこと明白、ただ、印性房の仇を討つつもりにて、日蓮に問答をしかけたものじゃ、さすれば、これに答えるは、まことに大人気おとなげのないこと故、一寸、言いあててみた迄のことである。その昔、マトーバというものが、善慧という僧侶と問答をして、その問答にまけて、くやしきの余りに七日目に死んだことがある。マトーバの妻はそれをくやしがつて、善慧に問答をしかけたが、忽ちにマトーバの妻たることをみやぶられてこれ又一問にして負けたとある。或る人が何故、マトーバの妻と、わかつたかと善慧に問うた時、善慧の曰く「その面に愁色あつて、哀音あり故にマトーバの妻なることを知るとある」今日蓮も、彼の妻女の如是相を僅にみて、印性房の妻たることを知つたので、無益の問答をして、時を費やすを憂いて申した迄で……あの尼僧が、真の求道者ならば、法華経の女人成仏をきかせてやりたかつたが、逃げだしたとは、自ら地獄の道に走りさつたも同様である」

「女人成仏の法華経の話とは、面白そうだ、一つやってみて貰いたいものだ」

これは先夜、地獄にいつてみてきたという話をした、容貌怪異な尼僧の口から出た言葉であつた。大聖人は心やすく質問を受けると、静かにのべられた。

「一切の川のまがれるが如く、女人の心は曲がれりとか、女人は地獄の使也、能く仏の種子を断ずとか、諸経に悪口されておるが、ただ、日蓮が信ずる法華経のみは、女人の成仏を許すの経文である。

天台大師は、法華經に三十卷の註をつくり給うたが、その第七の卷に、他經にはただ、男に記して、女人においては一向に、諸經において叶うべからずと書かれてある。即ち、法華經以外の經においては、女人は成仏をすることが出来ないとする。普賢經には「この大乘經典は諸仏の宝蔵なり、十方三世の諸仏の眼目なり、三世の諸もろもろの如来を出生する種なり」云々とあつて、この經より外は、すべて成仏のことではない。殊更、女人成仏のことはこの法華經より外に更にゆるされるものではない。銀色女經には「三世の諸仏の眼は、大地に墮落するとも、法界の諸の女人は永く成仏の時なし」とあるにも、かかわらず、法華經においては、八歳の童女が、その身をあらためずして、即身成仏をしたのである。これを始めとして、釈尊のおぼ、マカハジャハダイビク尼は、勸持品において、一切衆生喜見如来となり、ラゴラの母ヤシユタラ女も、眷属けんぞくの比丘尼と共に、具足千万光相如来となり、鬼道の女人の十羅刹女も成仏す、されば、法華經は、殊更に、女性の御信仰あるべき御經である。

この塚原の山野にあふれたる僧侶たちは、みな、女人から生れてこなかったものは一人もおろまい。しかるに、その女人たる自分の慈母を救うの經文を知らざれば、これ僧侶の面をしておろが、親を救うことが出来ない故に禽獸と同然である、法華經を知らざる諸宗の学者は、畜生に同ずるとは、このことを言うのである」

塚原大庭にあつまった、三、四百人の人達が畜生と言われたのだから、たまらない。

「わあっ……」

という、怒りの喊声が山野をふるわしてあがったのも無理がなかった。

(註一) 二乗作仏、久遠実成 二乗とは声聞縁覚。菩薩の次の二位で、この二つは、我見が強

くて法華経以外では仏にならない。仏は印度出現の釈迦ではなくて実は遠い昔から仏であつたことを久遠実成と言う。

(註二) 始成正覚 印度出現の釈迦が悟りをひらいて仏になつたと言う考え方

(註三) 無明の辺域 迷つておる仏だと、法華経の釈迦を劣とする。

(註四) 六即 天台大師止観にとく。理即、名字即、勸行即、相似即、分真即、究竟即を言い、

円経における修行の次第

四

「日蓮法師只今は女人成仏の結構な御法門を伺つて、まあまあありがたいと申しておこう。だが、法華経を知らざるものは畜生に同ずるとは、ちと慢心がすぎはしないか。おごりたかぶる心は、僧侶の戒むべきところと思つてどうじや、南無阿弥陀々々々々々々」

塚原の山野をうごかした、大聖人にたいする叱声嘲笑が、この質問でようやく静かになった。

六十をすぎたの、自ら分別くさい顔をした念仏僧である。

「拙僧は、この佐渡の島にすむものではない。わざわざ越中からきたものだ。今、日本国中の寺々の僧侶が、毎日唱えておる、南無阿弥陀仏の、唱名念仏を悪口して、南無阿弥陀仏と唱える、と、地獄におちると申しておるそうだが、本気で、そんなばかげたことを申しておるのか、この耳でたしかめたくてこの塚原にきたものだ、日蓮法師、しかとさようか……」

「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊とは、日蓮が、建長五年四月二十八日より、今年文永九年にいたる十八年の間、叫びつづけたことである。唱名念仏は墮地獄の根源とは四箇の格言のまっさきに申しておる」

「しかし、只今では流罪の身となった日蓮法師、その心持ちも変わっておられるであろうと思いがどうじゃなあ」

「越中から、わざわざこの日蓮坊をみたくてきたと申すから、ようく申しきかせよう。念仏が墮地獄の根源とは、日蓮が一番最初に言い出したのではないぞ、先ず、ものの道理をきかれない……」

大聖人が、一番最初に言い出したのではないと、言ったので、驚きの声が塚原の大庭にわいたが、何を言いだすかという一同の興味も手伝って、水をうったような静けさに変った。大聖人の

凜々たる声が一同の耳をおおうた。

「そもそも、わが国において、今日の如く南無阿弥陀仏の名号を唱えることは、法然のせんぢやくしゅう選択集にはじまる。法然は十七歳にして一切経を習い極め、天台六十巻を知りつくし、八宗を兼学して、一代聖教の大意を得たりと称して、選択集なる書物をあらわして、南無阿弥陀仏と唱えることを諸人にすすめたのによるものである。これをうれいて、みなも知る、天下無雙の智人広学の学者である、斗とがのおの賀尾明慧は、摧邪論三巻を造つて選択の邪義を破した。又三井寺の長史、実胤大僧正この人も希代の学者、名譽の才人であるが、浄土決疑集三巻をつくつて、法然の専修の悪行（註一）を難じ、比叡山の住侶、仏頂房隆真法橋は、天下無雙の学匠山門探題の棟梁である。この人も、弾選択上下をつくつて法然の邪義をせめた。こればかりではない。南都（奈良）山門（比叡山）三井寺の僧達が、度々、法然の選択集の邪義は、亡国のもとであると訴え出たので、土御門院の承元元年二月上旬に、専修念仏の張本人、安樂住蓮等は召しとらえられて、忽ちに頸をはねられ、法然は遠流の重科に処せられた。のみならず、後堀河院の嘉祿三年には、京都六か処から、法然の選択集とその印版をさがし出して、叡山の大講堂の前に、叡山三千人の僧侶があつまつて、三世の仏恩を報じ奉つるなりと称して、これを焼きすてしまった。しかも、法然の墓まであばいて、その骨を京の鴨川にながしてしまったではないか。これでは、念仏を唱えるならば、地獄におちることは、法然自身が証明しておることではないか、どうじゃ、念仏無間は日蓮

坊が發明したのではなくて、その先例があり、法然自身が実験証明ずみだ御老僧、承知されたか」

「……………」

「返答がないのは、耳が遠いとても申すのか、以上のことは、皇代記という書物にあり、専修念仏の行は諸宗衰微の基なりと、これを禁止するの宣示や御教書は数々あるぞ」

老僧は、なにか、言いたげに、口をぱくぱくさせたが、それは次の質問者が立つたので、老僧の発言の機会はなくなってしまった。

「さてまで日蓮法師、それ程まで禁止された、念仏が何故、斯くも今日隆盛であり、それに敵対して、念仏墮地獄を唱えた、汝自身が、流されたら再び帰えることなしと言う、この佐渡の島に流されておるではないか。法然上人は、遠流と言うても、讃岐に十一か月おつたまでじゃ、汝こそ、許されることなき、この島に流されておる、法華經こそ墮地獄と申してもさしつかえないではないか、どうだどうだ」

と、元氣な奴が、つつ立って、つめよせたので、どうだどうだのこの声に、塚原にあつまつた、三千人の人々が、口をそろえて「どうだどうだ」と合唱した。その勢いで、大杉の枝の雪が、あっち、こっちでどさつと落ちはじめたので、わいわいさわぎになって、「つめたいぞ」「さわぎはやめろ」「問答をつづげろ」などと叫ぶが、こっちやになって、一寸混乱のてい

であつた。

大聖人が口をひらかれたので、大庭は静かになつた。

「その悪口は只今は、そのまま頂戴いたしておこう」

「では参つたと申せ」

「うわつはあはあ」

大聖人が、六尺三寸のからだ体軀をゆるがして、笑われたので、こんどは一同が、唾然としてしまつた。

「……なにが、おかしい、馬鹿もの、汝は口さき三寸だけで、今日迄きた悪僧だ、笑いでごまかさず、参つたら参つたと申せ」

「貴公は、法門をもつて、この日蓮にせまつたのではないから、笑つたのだ。たんなる悪口を言うただけで、法門を申したのではない。悪口とか、石をなげる、瓦をなげる等の罵詈ばりざんぼう譏諷は鎌倉の街中で、常々頂戴しておるので、貴僧の悪口も、ついでに頂戴しておこうと言つた迄のことである。貴僧は眼を何処につけておる」

「御覽の通り、余り立派ではないが、鼻の両うえ眉毛の下にありますぞ」

「汝は小乗教を学ぶものか、仏者か、眼を何処につけておると言う時はその肉眼を言うのではない。涅槃経の第六に「大乘を学するものは肉眼ありといえども名づけ仏眼となす」とあるを知

らないのか。とぼけるではないぞ」

ぐいっと、聖人に睨られると、質問の僧侶は、へなへなど坐ってしまったのは面白いくらい不思議であった。

「日蓮は今をさる十三年前の文応年中に、立正安国論一卷を草して、鎌倉殿に献じ、法然の選択集を、従来の破折論とは全く異なった観点より論破した、而して念仏宗に日本国中が帰依するようなことがあるならば、必らずこの国が、他国のために攻められると言う、開闢かいびやく以来の大事が、出しゅつ来たいすると予言したが、その後九か年をへて、大蒙古国の牒状が、文永五年にきたことは、この山野にあふれた人々の知る所であろう。この事実をわざと知らず、知っても、驚かぬものどもは、日本人ではない、立正安国論こそ、この日本に生れた日本人日蓮が、国を患うれうるが故に筆とつた日本人の魂の書と申してもさしつかえがない。日本の運命を仏眼をもつて眺めたる書論である。国の亡びることこそ、大事の中の大事と申すのである。今は配流の身の日蓮であるが、日蓮の眼は、末法万年を見通すことの出来る眼である、汝は、只今、何故、念仏が繁盛するかと問うたが、日蓮は、法然の念仏が流行するならば、国家を破ぶるものとして、立正安国論に予言したが、それが事実となつて現われ、幕府は今や蒙古襲来におびえて、加持祈禱かじきとうに大騒ぎをしておるではないか、なぜ、念仏が国を破ぶるの法であるか、蒙古襲来をうれい、日本人として国を失うことをうれうるものがこの山野に僅かでもよい、おるとしたならば、この日蓮坊に先ずたずねるのが、日

本人ではないか、ここには、祖国を失うことをうれうる日本人はおらないのか、自分だけは西方の極楽浄土に生れればよい、後はどうなろうとかまうものかという鳥合の集なのか、日本人はおらないのか、日本人ならば、何故、念仏を唱えると国が亡びるのかと、問うのが当然ではないか、日本人は一人もおらないのか、国をうれうる日本人はおらないのか」

大聖人の絶叫のみきこえる。静まりかえった塚原の山野になった。

「俺は日本人だ。国が亡びたら大変だから俺はききたい。そして坊主ではない、俗人だから、日蓮法師にたずねても恥しくはないだろう。どうして念仏を唱えたら国が亡びるといふ馬鹿げたことなるのか、ものの道理がわからない、教えてくれ」

自ら俗人と称して立ち上った。

「よくぞ問うた。念禅真律等々宗旨宗派はことなつても、蒙古襲来という、他国がこの日本国を攻めると言う時には、互いに武器をとつて、国を守るのが当然である。それでこそ日本人だと言えるのだ。だが異体同心でなければ、戦いは勝つものではない。異体異心ならば、戦いは負けるにきまつておる。法華経は日本人全部を異体同心にする教えであると言ふことを忘れてはならない。

では何故念仏を唱えれば地獄におちるか、この日本の国が亡びるかをのべてみよう。よくきくがよい」

「南無阿弥陀仏とは如何なることかを考えてみよう。南無と中す字は敬う心、随う心言うのである。では阿弥陀仏とは如何なる仏であろうか、その源は釈迦如来の五十余年の説法の内、さき四十余年の阿弥陀経等の三部経にとかれた仏である。この阿弥陀仏は仏になる前は法蔵比丘と称して、十劫の間、修行して、ついに阿弥陀仏となったという。その国はこの我々のすむ娑婆世界より西方十万億仏国をすぎた、極楽世界というのである。

だが、しかし、どなたが、阿弥陀仏ということを言い出したのかを考えてみるがよい。釈尊が阿弥陀仏が西方におるといわれたからこそ、阿弥陀仏があるのだ。言うなれば仏様の口から出た仏にすぎない。しかも、そのすむ阿弥陀の極楽世界とは、この我々のすむ娑婆世界より、十万億仏国をすぎたと言う所であると言う。ようくきかれよ。では我々のすむ世界には我々をすくつて下さる仏様はすんでおらないのだろうか。そんな馬鹿げたことがあるものではない、我々の娑婆世界に、我々を救ってくれる仏がいらないと言うのなら、西方の弥陀の世界をあこがれる気持ちもわからぬではないが、そんなことはない。我々のすむこの娑婆には我々を救つて下さる仏様がちゃんと、すんでおるのである……」

一つの野次もとばさせない、大聖人の所論である。両眼は、慈愛にみちて、みる人をしてやわらぎを与え、その態度は峻厳しゅんげんで人をして、どうしても耳を傾けさせるようにしている。さすが二十一年間も街頭できたえた梵音ぼんのおん声である。

「法華經に「今この三界（註二）は皆これわが有なり、その中の衆生は悉く是れわが子なり」と教主釈尊は言われておる、してみれば、教主釈尊こそ、この娑婆世界の仏様ではないか。また「今この所は諸の患難多し、唯我一人のみ能くこれを救う」とも言われて、教主釈尊は、日本国の一切衆生の父母師匠主君である、この三徳あるが故に、釈尊を此土有縁深厚（註三）の仏と称するのである。一切經六万巻の中に、阿弥陀仏が、娑婆の人々の父母とも主人とも師匠とも説いた經文は一つもない。……しかもその阿弥陀仏は、法蔵比丘という時になにを修行し、いかなる經文をきいて成仏、すなわち阿弥陀仏となつたのか、それは法華經を聴聞し法華經を修行した故に仏となつたのである。その故に、弥陀の四十八願中の第十八の願に「たとい我れ仏を得るとも、ただ五逆と誹謗正法とを除く」と言われておる、弥陀の言うところの正法とは、自分が修行したところの法華經をさすのである。五逆の人を救わないと、はつきり言つておるが、浄土宗の人々は、この娑婆にすんでおりながら、自分の父たる教主釈尊をすてて、他人たる阿弥陀仏を信ずる故に、五逆罪をおかしておる、日蓮が念仏門徒は地獄におちるとの法門は、日蓮の言葉ではなくて阿弥陀自身が言われておる言葉ではないか、こここのところをよく考えてみるがよい。されば、念仏は仏の説ではなくて、人師の説であるから、このような矛盾が出来てくるのである。

支那の齊の時代に曇鸞法師どんらんと言う人があつて、竜樹菩薩りゅうじゆの十住毗婆沙論じゅうじゆびしやをみて、仏道修行におい

て難行道と易行道とをたてた。唐の時代に道綽どうしやくという人がおつて曇鸞法師が三論宗から、浄土宗にうつる書物を見て、自分も浄土宗に帰して、聖道、淨道の二門をたてた。その道綽の弟子に善導というのがおつて、雑行、正行の二門をたてて、念仏を正行とたてて支那において大いにこれを弘め、この流れをくんで、日本に念仏を盛んにしたのが法然房である。法然房の墮地獄の話は先きののべたので今は略するが、支那において念仏を大いに弘めた、善導和尚は如何なる死に方をしたかを話してみよう。「この身は諸苦に責められて、暫くも休息なし」と称して、自分の寺の前の柳の木に登つて、西に向つて「願くば仏の威神をもつて、観音、勢至きたつて、我をたすけ給え」と唱えおわつて、青柳の上より身をなげた。首にくくつた、繩がきれたか、柳の枝が折れたのか、大旱魃の堅土の上におちて、腰骨を折ちくじいて、七日七夜、おめきさけんで死にはてたと申すことである。「流れをくむものはその源を忘れず、法を行ずる者は、その師の跡をふむべし」という言葉がある。この塚原にあつまった、浄土念仏の人々は、師匠の跡をふんで、善導の如く自害をせねばならんぞ、頸をくくつて死ななければ師匠にそむくと言つてもよいのだ。どうだ、みんながみんな、善導の如く、頸をくくれ、しからずんば、師敵対（註四）と申してもよろしいのだ、これでも念仏は墮地獄の教えでないというのか、念仏無間は日蓮が言葉ではないと申したことがわからないのか、善導自身が、身をもって諸人に示し、これを日本に興行した法然自身も亦、念仏は墮地獄の教えなることを、これまた身をもって示しておるではないか、理窟

ならば白も黒と言いざる、口達者な者もここにおるであろう、だが、事實はどうする、歴史はどうする、歴史はもはや書きかえることが出来ぬのだ。教相判釈の上から言うならば、弥陀の三部経は、釈尊一代五時の説教の内第三方等部の内にあつて、四卷三部の経は全く釈尊の本意ではない、故に法華経の序分たる、無量義経には、四十余年いまだ眞実をあらわさずと説いて、念仏は暫く、衆生誘引の方便であると称して、教主釈尊自身が念仏の法門を折ち破ぶつておるのだ。しかし、そんなむずかしい法門をとくよりも、善導和尚の臨終の事實を話した方がわかりがよい、さあさあみあげれば雪こそつもつておれ、恰好のよい形の枝ぶりではないか、本当に念仏を唱える気なら、あの枝に頸をくくつてぶらさがつたがよいぞ、念仏者として頸をくくらずば師にそむく咎ありと申してさしつかえがない、さあさあ西に向つて、念仏者は、杉の枝に頸をくくれ、それでこそ弟子と申してさしつかえがない。どうした。……どうした……返事がないではないか」塚原の大庭には、大聖人の声のみが、びんびんとひびくのみで、三千人は口をとじて、大聖人をただみあげるのみであつた。

(註一) 専修の悪行 阿弥陀一仏のみをたのんで、他はすべて、すててしまへという教

(註二) 三界 この場合は我々凡夫のすむ娑婆(地球)を意味する。

(註三) 此土有縁深厚 この我々のすむ娑婆に最も縁が多く、娑婆世界を住所とする仏

(註四) 師敵対 師匠に齒向かうこと。

五

「日蓮坊、汝は酒をたしなむと言うが本当か、しかもなかなかの呑み手ときいたが、どうじや」

「日蓮に酒の話をするくらいなら、御手前そこに、一升樽でも御持参か、この問答の最中、酒があるのなら、遠慮はいたさない、早速にでも、いただきたいが、これが御返答である」

この答は、塚原の山野にあつまつた人々をして、啞然とせしめた。質問者は、次のようにどなりつけた。

「日蓮坊、汝は五戒をたもたざることを僧としてどう思っておる。五戒の第五は不飲酒戒であることぐらいは十分、承知のことであろう」

「如何にも、十分承知のことである」

「知っておつて、五戒を破ぶり、てんとして恥じることなきは、仏をおそれぬ坊主として悪口されても仕方があるまい」

「汝はいずれの宗旨の僧侶か知らぬが、よほどのたわけものと、この日蓮はみた。禪寺の入口には、碑石を立て、おこがましくも戒壇石と称して「不許葷酒入山門」と書かれておるが、酒は智くんしゅきんもんにいるをゆるる手

水と称して、堂々と山門に入るを、まさか知らぬとは申すまい。……

日蓮はたしかに、酒をたしなむ、だが、吞まずと他に偽って酒をのむ人、のむ故にのむと称して、酒を吞む、いずれがよいのか、貴僧は、前者をとるものであるうが、日本一の正直な日蓮は、酒を吞むが故に吞むと称するのだ」

「……しかし、いくら理屈をつけてみても、五戒を破ぶつた破戒僧には、間違いがないではないか、如何だ、日蓮……」

大聖人は、大人気ない悪口を軽るくうけて、意に解しなかった。

「では、日蓮が、何故酒をたしなむか、その由来をきかせようか……、その昔、伝教大師は叡山三千人の学生に戒めて、叡山は、山深かくして、霧多きが故に、保健のために飲酒を許るされたと伝へる、但し大智度論十三に穀酒、果酒、菓草酒をあげていて、伝教大師の許されたのは、薬酒を用うべしと言うことであつたに違いない、但し日蓮が、酒をたしなむのは、上の如き理由によるのでもなく、先例をあげて、我身を助けるが如き言説をなすものではないことを、よく、きくがよい」

塚原山野の人々は、大聖人の御言葉いかんによつては、今後、おうつぴらで、酒がのめそうな議論が、出てきそうなので、それこそ、今にでも一杯よばれるかの如き、嬉れしそうな顔色で、話をきこうとの人々の態度は、中々よきものがあつた。

「仏教を習おんとするものは、先ず時を知るべしとは、日蓮の言葉であるが、今の世は経文にとかれた、末法という時代であることを忘れてはならない、末法とは無法ということだ、勿体ないが、釈尊の法がなくなってしまうたと言ふことを末法というのだ」

反対の質問をしようとする、喧騒が諸々方々に起りかけたが、大聖人の梵音声が、それを十分に押さえてしまったのは、次の言葉が出たからである。

「その証拠には、今、釈迦牟尼如来を拜んでおる宗派が何処にあるか、この塚原の山野を埋めつくした、三百余の僧侶が、常にこの娑婆世界に住して、我等が父なり母なりと言われた、釈尊を全くないがしろにしておるのではないか、天台宗はもと、天台大師の三大部を（註一）根本宗典として立った宗旨ではあるが、その弟子の慈覚大師が、法華経より、真言すぐれたりと断定したによつて、今は、叡山は真言宗とみなしてさしつかえがない、その真言宗は何にを拜んでおるか、大日如来を拜んでおるではないか、その住所は、浄居大自在天であつて、この娑婆世界とは縁もゆかりもない仏である。念仏宗は阿弥陀仏を一向に拜し、禅宗は、教外別伝不立文字と立つて仏像をたいて尻をあぶつた奴が大禅師と称讃さる、天魔の所行である。どこにも、釈尊をあがめる宗旨宗派は一つもないではないか、故にこれを称して釈尊の法が滅したが故に今は末法の時代、無法の時代と称するのである。末法は如何なる戒を修する時代であるか、釈尊の法がなくなつたら、如何なる仏法が、修せられるかを御存知あるまい、御存知なければこそ、この日蓮は

建長五年四月二十八日以来、今日まで二十年間叫びつづけてきたのである」

「早く、酒をのんでもよい話にしてくれ、今夜からでも、おうっぴらで、日蓮流で呑もうと思つてゐるのだ。酒の話をたのむぞ」

昨夜の寒さしのぎのため、のんだとみえる、からの一升樽を右手にもつて、左右にふりながらの質問者である。

思わず、笑い声が諸処方々に起つた。

「三世を知るを仏と申す、釈尊は未来を考えられて、我が滅後正法一千年、像法一千年、末法一万年とさだめられ我が滅度の後の次の日より正法五百年の間は一向小乗教を弘通すべし、後の五百年は権大乘、像法一千年の内には仏法漸く漢土日本に渡りきたる、と申された。故に富楼那尊者が、維摩ゆいまに向つて二百五十戒を説いたところ、維摩は穢食を宝器に置くことなかれとこれを難詰し、オウクツマラ（人名）は文殊に小乗戒を批評して、「嗚呼あゝ、蚊蚋もんせいのゆくえと、大乘空の理を知らず」と叫んだ、今末法に入つては、法華経の大乘教のみ流布の時代である。五戒をたもつ二百五十戒をたもつのと誇称する奴輩は、市に虎を放なすが如しと言ふ言葉すらある。酒はのんでもよろしい、但し酒にのまれてはならん、これ日蓮が弟子達に常に言いきかず言葉である。ど

うじゃ、からの酒樽なぞいくらふつても中味がなければ、つまらんぞ」

どつと笑い声が、緊張した、問答の庭に上った。

「さて、酒をのんでもよい理屈は、わかっただろうが、これは日蓮が、大乘の戒を持つが故に酒をのんでもよいのだ、嬉れしように笑いながら、日蓮が顔をながめていても、この塚原の山野にあつまった律宗は勿論のことだが、念仏宗、禅宗、真言宗の人々は、酒は一滴たりとも口にする資格がないのだ」

「なんだと、自分はのんでも、他人はのんではならぬとは驚ろいた。ぬすつと酒の猩々坊主、何故だ、話してみる」

口々に意外と思う心をこめて、連呼した。

「さればさあ、念禅真言等々の僧侶は大乘の教を修行する僧侶ではないからだ」

「なんだと、真言宗が、大乘の教でないとはいかかる経文にある」

「禅宗を。日蓮、汝は小乗教とみなすのか」

「馬鹿々々しい、南無阿弥陀仏こそ、末法に於ける唯一の大乘の教ではないか」

各宗それぞれに口を極めて、名乗りをあげたのは無理もなかった。

大聖人は、につこり笑って、その人々をみると、次の如く言い放った。

「如何にも、念禅真言、律宗は言う迄もなくこれを習う人々は、この日蓮は小乗教と断定する

ぞ」

「何故だ」

「何故だ」

「どうしてだ」

「そんな馬鹿なことがあるか」

塚原の山野にこだまする声は、先き程の笑い顔どころか、殺気を感じる、問答の庭となりはてた。後年、この塚原の問答に、安土問答と東海寺問答（東京品川区にある）とを以って、天下三問答と称するのも、むべなるかなと言いたい程の、緊迫した空気が流れ始めていた。

大聖人は、群盲なものぞとばかり、雄然として口を開かれた。

「騒ぎたてる諸僧達は、僧侶になる時には必ず受戒をして僧侶になつたろう。もし、受戒せずして僧侶になつたと言うものは、この公式の問答の場においては、日蓮と口をきけるものではない。税金のがれ、労役のがれ、借錢のがれに近頃は頭を丸めて、僧侶になりすましておるものがあるが、これは、僧侶の数には入らないことは諸僧もみとめられるところであろう、世も末になれば妻子を帯せる僧もおれば、魚島をくらう僧侶もおる、そんなちいさなことは日蓮は問うのではない。貴僧達は必ず戒を受けて僧侶になつておる。特に真言宗、念仏宗の人々にきこうではないか。何処で一体受戒をなされて僧侶となつたのか、何処の戒壇で戒を受けて僧侶の資格をとら

れたか、さあさあ、すみやかに御返答あれ」

真言宗の真観と名乗った、僧侶や、明らかに良観の弟子達で、この問答を企てた背後の有力な僧侶達と思われる方面に、大聖人が、眼をむけられたが、敢て一問の返答もなかった。

「御返答がないので、失礼ながら、日蓮坊が自問自答致そう、先ず大半の僧侶達は、奈良東大寺の戒壇に登られて戒をうけたことであろう。その外ならば筑前太宰府の観音寺か、下野の薬師寺の戒壇において、受戒されたに違いない。さすれば、東大寺、観音寺、薬師寺の三ヶ寺の授戒は、小乗戒の授戒であつて、大乘戒の授戒の戒壇ではない。念仏宗と申し、真言宗と申すは、大乘の教たることは、日蓮も一応みとめ申そうが、その大乘を氣どる処の僧侶達が、何故に、小乗の戒を受けて、僧侶となられたのか、そこ迄は氣がつかかなかつたと申したいのか、だから、日蓮の眼からみれば、貴僧達は小乗戒の授戒をうけたのだから、口でよむ経は大乘だと申しても、戒は小乗戒を授戒させられたのだから、日蓮が如く、酒をのんではならぬのだ。不飲酒戒をたもつて、酒をみても、仏は仏でも、喉仏をならすだけでがまんせねばならぬのだ、日蓮だけが酒をのめる理屈がわかつたか」

塚原三百人の僧達は、ただくやしくて、何にも言えぬのが残念だと、かすかなためいきが、そこそこきこえるのであつた。

「人皇二十九代欽明天皇の朝に仏教が、我が日本の国に渡来してより、孝謙天皇四十六代に至る、二百年間というものは、我が国では授戒する作法を正式に行なうことが出来なかつたのである。その理由は小乗教の授戒法が非常に厳重な規則があつたからだ。小乗教の授戒法は三師七証（註二）、がそろわなければならなかつたからである。故に、孝謙天皇の御代に鑑真和尚（註三）が、我が朝に来朝して、勅命をもつて、東大寺の仏前に戒壇をつくり、聖武天皇、光明天皇、皇太子登壇して菩薩戒をうけ、その他五百人の道俗が登壇して比丘戒（註四）、ウバソク戒（註五）を受け、天平宝字五年正月に、東大寺の戒壇を、下野の薬師寺（現在なし）と、筑紫の観世音寺とに分置し、東国の者は薬師寺に登り、西国の者は観世音寺の戒壇に登つて受戒することに定められ、宗学については小乗大乘の区別はあつても、全国の僧侶は、皆な東大寺の戒弟であつた。それは、薬師寺と観世音寺の戒壇は、東大寺の戒壇の分置、即ち出張所だからである。さて、以上が、伝教大師が叡山に法華経迹門の戒壇を建立する迄の、日本の僧侶の授戒の様式であつた。然るに、伝教大師は、大乘の仏教を修学するものが、東大寺の小乗戒を受けることの矛盾を考えられて、ついに弘仁九年の十二月に、

「我が天台の祖師である南岳大師、天台大師は、昔生に印度の靈鷲山において、大聖釈尊より親しく法華経の説法をきき、菩薩の三聚浄戒をうけられた。而して菩薩の三聚浄戒は師資次第に相伝

して我れ最澄に及んでいる。我れ常に一切の聖教を閲するに、小乗の声聞僧及び声聞戒の外に、大乘の菩薩僧と菩薩戒とあり、又専ら大乘教によりて少しも心を小乗に向けざる一向大乘の人と、専ら小乗教にのみ依りて毫も心を大乘の方にむけざる一向小乗の人とがある。今我が宗の学生は、大乘の戒定慧によつて修行せしめ、ながく小乗下劣の修行を離れしめん」（註六）と断言せられて、自ら三宝の御前に誓つて、かつて延丁四年東大寺の戒壇に登つて受けられた、四分律の二百五十戒を断呼すてられて、叡山三千人の僧侶にさととして「今より以後声聞の利益を受けず、永く小乗の威儀にそむくべし」と言われたのである。この伝教大師の志を可とせられて嵯峨天皇は伝教大師入滅の日より七日後、即ち弘仁十三年六月十一日、治部省の官符をもつて叡山に、大乘戒壇が建立されたのである。これ釈尊滅後、一千八百余年が間、印度、支那、否一閻浮提第一（註七）にいまだかつてなかつた所の靈山の大戒が、日本国に始めて創立せられたのである。伝教大師の功を論ずれば竜樹天親にもこえ、天台妙楽にすぐれておわす聖人であると申さればならない。この戒壇建立については、延歴二十一年正月十九日、天皇自ら、京の高雄寺に行幸せられ、その御前に於いて、伝教大師と南都七大寺の碩学勤操、長耀等十四人等と、法門によつて勝敗を決したことによつて、建立せられたことを忘れてはならない。だが然し、只今は仏法における如何なる時代であるかを知らねばならない。本年は伝教大師滅後三百五十年、すでに時代は、仏説の如く末法である。末法においては、法華經のみ流布するの時であることは仏も法華經にとかれ

ておるが、天台大師は遠く妙道にうるおわんと言われ、伝教大師は末法はなはだ近きにありと言われて、法華經一經のみの流布の時代を恋いされたのである。今末法に入つて正に仏滅後二千二百余年であり、法華一經のみ流布の時である。さてさて各々、長い長い談議で、おつかれだったろうが、日蓮が酒をたしなむから始まったこの話だ。そして、貴僧達が、何故、酒樽をみても、表むきは喉仏が念仏の鐘を叩たくようにのみたくとも、呑めぬ道理は、末法流布の法華經にそむくが故に酒をのめぬのじや。たとえば十重禁戒の第五をあげようか、不飲酒戒とは、爾前の諸經の意は、仏は不飲酒をたもつと説けり、然かれども、法華經の心は爾前の仏は飲酒第一なり、ゆえはいかん、爾前の仏は一住世間の不飲酒戒をたもつにいたりと雖も、未だ出世の不飲酒戒をたもたず、二乗閻提等の九界の衆生をして無明の酒をのませて成仏せしめず、能化の仏いまだ飲酒罪をまぬがれず、いわんや所化の弟子をや。然るに法華經は悉く成仏せしむ。今身より仏身に至るまで爾前の飲酒罪をすてて法華經寿命品の久遠の不飲酒戒をたもつや否やとやるんだ、どうだわかったか。法華經の功德の偉大さを、しかも、堂々と仏前において、酒がのみたければよくきけ、そもそも法華經の戒とは、小乗の五戒は勿論のこと、二百五十戒、並びに梵網經の十重禁、四十八輕戒、華嚴經の十無忌戒、瓔珞經の十戒等をすててしまつて、法華本門文底寿命量の下種たる南無妙法蓮華經と唱えるのが、ただ今、末法における、只一つの戒なのだ。法華經に是名持戒と説いておるのは、このことをさすのだ。貴僧達こそ、爾前諸經の無明の酒に酔つたる人々と称

するのだ、それでも酒をのまず、五戒をたもつと称するなれば、すでに、妄語罪を犯した人々ではないか、如何だ、この道理がわからぬと申すか」

(註一) 法華玄義、法華文句、摩訶止観

(註二) 正しく二百五十戒を受けた人が三人師匠となり七名証人となるのである。

(註三) 唐の揚州の人、戒律を持ち、我が国に正式の三師七証がそろわぬことをきき、日本の

入唐僧栄叡普照の請により、日本来朝を企ててから、前後十二年間かかって来朝した。

日本にきた時には、すでに盲目になっていたのは有名な話

(註四) 具足戒、二百五十戒を言う。

(註五) 五戒、即ち、不殺不盜不邪淫不妄語不飲酒を言う。

(註六) 伝教大師の一心戒文上の文

(註七) 世界第一のこと。

六

塚原三百人の僧侶は、無明の酒に酔いしれた、しかも、自ら大乘の教を修行するとも、小乗戒

を授戒して、僧侶となったが故に、すべてこれ、小乗教の徒にして、大乘法華經を行ずる大聖人とは、言わば、問答をする資格はないぞときめつけられて、もはや、一言も発する僧はいなかった。

この時、さつと音がして、大聖人の法衣の袖に矢がつきささった。場内は、わあつと騒然となり、一瞬の後無気味な静けさが湧いた。誰しも二の矢を期待していた。だが大聖人は、静かに、

「南無妙法蓮華經

々々々々々々々々

と唱え始めた。

不思議、不思議、その大聖人の御題目につづいて、

「南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經」

と唱和する声が、この塚原の山野の此処彼処に起つてきたのである。

阿仏房夫妻の唱題もあつたろうが、どうも、それだけではない。念仏の人々の口からも唱えられた、題目の声もまじっているようである。そうでなければ、このような唱題の力強さがある筈がない。

この時である。

地頭本間六郎左衛門の大声叱咤があった。

「本日、塚原の問答は、これにて終りとする。但し、異議あるものは、問答をつづけてさしつかえないぞ……」

二の矢は大聖人をめがけて、ついに飛んではこなかった。

「ないとみえるな、質問者はおらんな、では、この問答、これで終る」

六郎左衛門が合図をすると、家来の者どもが、六尺棒をもって、ばらばらと大聖人の前にすすみ出ると、

「問答は終わったぞ、さあさあ即刻に退散退散々々」

「退散せぬものは、害心のあるものとみて、ひつからめて、みせるぞ」

「ちれちれちれ」

六郎左衛門の家来が、どなりちらして、六尺棒をふりまわして歩くので、さすがに、あれ程いた人数もみるみる退散してしまった。

今迄ここで、問答があったのかと疑う程の、不思議のようなしづけさが残るのみであった。

六郎左衛門の五、六人の家来が、念仏宗の数珠を六尺棒にいくつもいくつもひっかけて、戦利品のようにもってきた。

「大聖人さま……」

本間家の家来の一人が大聖人に声をかけた。

「念仏の数珠が、こんなに落ちておりました。まあまあ戦争で言えば、敵の首をとったようなもので、ございましょう」

「本日の問答、誠に御見事でございました。私も只今より、南無阿弥陀仏は申しますまい。はい、私の数珠も、これこの通りでございませう」

と言うと、腰袋から数珠をとり出して、

「おうい、その戦利品を火葬にしようではないか、皆のものごとにもってこい」

「そうだそうだ」

と五、六人の家来が、捨ててあつた数珠をあつめると、杉の枯葉をさがしてきて、やがてそれに火を放った。くすぶっていたが、やがて、それは燃えだしたが、手脂のしみこんだ念珠とみえて、人を焼くような、いやな匂いであつた。

「これは妙だ。本当に討死したものを焼くような匂いがする。死人しびとの匂いだ。くさい」

「ナンマンダ、ナンマンダ」

「馬鹿野郎」

とナンマンダを、唱えた家来が、横面をなぐられた。

「なんで、なぐる」

「ナンマンダを言うくらいなら、その数珠に、火をつけるな……」

「そうそう今日からは、唱え事が変わったんだ」

「そうだろう」

「ナンミヨウホウレンジキヨウタタ」

「そうだ。俺も南無妙法蓮華経だ」

家来たちも、唱題しながらの後始末であった。

佐渡の代官、本間六郎左衛門は、家来が、一勢に、南無妙法蓮華経と唱えるのを、にがにがしい顔でききながら、問答のあった塚原の大庭を従者一人つれて、黙然として去りゆこうとした時である。

「本間六郎左衛門尉殿、暫らく暫らく」

大聖人が、大きな声で呼びとめられたのである。

不動金縛の術にでもかかったかの如く、六郎左衛門の体軀はからだびつたりととまった。

「日蓮、不思議を一つ申してみようか」

大聖人の御言葉であった。

「不思議を申すとは……」

「されば、御貴殿はいつ頃鎌倉にのぼられますか……」

「なんで、そのようなことを、尋ねるのですか……」

「されば、本間六郎左衛門尉殿を、まことの武士と思つたずねたのです」

「まことの武士と言われたなあ」

「さよう」

「無礼なり日蓮法師、いやしくも、武蔵守宣時殿の信任をえて、この佐渡一国の代官職を御奉公する、本間六郎左衛門、まことの武士でなくて、どうして務まるか、言葉の強いのは、日蓮法師のくせとは言え、その口が災を自から招いておるとは、名僧でも、お気づきにならないとは、残念至極……」

「いや、これは御立腹を項戴して、恐縮至極でございます。だから、六郎左衛門殿を、まことの武士と思つて、不思議を一つ申しきかせようと、思うのです。本日の問答の御世話かたじけなく思つてのことです」

「御心底わかりました。鎌倉に上るのは、百姓どもに、農をさせまして、七月頃に致そうかと思つております」

「六郎左衛門殿、失礼でございますが、その腰に帯びておるものは、なんでございますか……」

「言わずとした武士の魂こゝろでござる」

六郎左衛門は、また、大聖人から強言をきかされると思い、思わず力をいれて言いきった。

「弓箭ゆみやとるものは、いざ鎌倉という時に、ものの役にたつてこそ、日頃の所領を賜わつておるはずで、百姓に農をさせるために、大小を帯してはおらないことは御承知と思つ」

「そのような用心は六郎左衛門、常に致しておる、日蓮法師おだまり下さい」

「だまりません。いざ鎌倉となつてから鎌倉に上つてなんの役にたちますか、六日の菖蒲あやめ十日の菊ではありませんか。合戦の起らぬうちに鎌倉に登つて、高名を立てて所領をたまわる気はござらんか。本間六郎左衛門と言えば、相模の国では、中々由緒ある武士ではありませんか。合戦におくれたらば、末代迄の恥辱これにすぎるものではありませんぞ」

「では、合戦が、日蓮法師、鎌倉にでも、起きると申されますか……」

「さよう」

「そんな馬鹿なことが」

「起りまずぞ、必らず起ります。だから、不思議を一つ申してみましよう、と言つてお引きとどめしたのです。合点がなりませんか」

「合点がなりません」

「日蓮は日本の人の魂であり、日本の柱であります。この日蓮を、斬首せんとし、果たさずして、この佐渡の島に配流させた。故に、この罪によつて、北条一門に同志討ちが必ず起きると申し、次ぎには他国よりこの国を攻めるの難が必ずきたると、立正安国論に書きとどめたのです。同志討ちすることを自界叛逆じかいほんぎやくの難と言ひ、他国から、この日本国をせめることを、他国侵逼たこくしんびつの難と言うのです。その自界叛逆の難が、日蓮流罪後百日後に起こると、日蓮は鎌倉で予言しましたが、その自界叛逆の難が、近く起こる。それ故鎌倉に急ぎ急ぎ上りたまえと、六郎左衛門尉、私はすすめておるのだ」

「わかりません、わかりません。日蓮法師、私も佐渡一国の代官、流罪の僧の言葉に動かされて、鎌倉に上ることは、出来かねます。御免つ」

六郎左衛門尉は、くるりと背を大聖人にむけると自分の屋敷に向つて、歩をすすめた。

念仏の教珠を焼いた先程の煙が、火勢がおとろえて、今は一本の筋のようになって、まっすぐに大聖人の前に立ちのぼっていた。大聖人も寂然として、塚原の三味堂にむかつて脚をむけるのだった。

文永九年二月十五日、京の南六波羅探題、北条時輔は、弟の北条時宗の密命により、北の六波羅探題北条義宗によつて殺された。時輔は時宗より三つ年長で、時に二十五歳であった。（註一）時輔は北条時頼の長男で、時宗の兄であったから、執権職は我こそと思つておつたのに、弟

の時宗に家督をとられ、年来悶々たるものがあつたので、逆心を企て内々その用意ありと、時宗に告げたものがあつたので義宗を上落せしめてこれを殺したのである。鎌倉では時輔の叛逆に相呼応して時宗を殺そうとねらっていたものがあつた。それは北条一門の、北条公時きんときと北条教時のりときであつたが、これは露見することが、時輔よりも早く、公時と教時が一つ屋敷で密談中、時宗の討手が、すきまもなく打ちこんで、一人ものこさず討ち取られてしまった。時に文永九年の二月十一日であつた。自界叛逆の難は大聖人の予一呂通り、京都に鎌倉に起つたのである。

この自界叛逆の報らせは、二月の十八日に佐渡の島について。

本間六郎左衛門はあわてた。直ちに塚原の三味堂にかけつけて、大聖人のお顔をみると、

「南無妙法蓮華経」

「南無妙法蓮華経」

「南無妙法蓮華経」

と唱えつつ、ただ、涙をうかべて、暫くは言葉もなかつた。

「もったいなや、大聖人さま、正月十六日の最後の御言葉を、疑うより、嘲つておりましたが、三十日も、たたずの中いたしました。これでは、蒙古国の攻めきたることも本当でございませう。また、念仏を唱えれば、墮地獄ということも、本当でございませう。六郎左衛門、今日只今より念仏を申しませぬ。何卒、お助け下さいませ」

「おわかりになりましたか」

大聖人のやさしい声とその微笑、六郎左衛門は、心の中で、噫々もつたいない。このお方は仏様だときつと感じとつた。

「大聖人さま、ここは、三昧堂とは、うそでございまして牛や馬の死んだのや、罪人をすてて殺すところでございます。六郎左衛門の罪をお赦るし下さいませ」

合掌してわびる六郎左衛門に、大聖人は声をかけられた。

「六郎左衛門殿、それよりも、早く早く、鎌倉に急ぎなされ、それが、武士の習いではないのか」

「はい、さよういたします。でも、半か年以上にもわたる私の無礼な所業を何卒お赦るし下さいませ。そのお赦るしの声を、きかなければ、なんとしても、この島から出てゆけませぬ」

「許すも、許さぬもあるものか、この三昧堂は、私にとつては、日本第一富める者がすんでおつた、金殿玉楼の地と申してさしつかえがない。それより、一刻も早く、鎌倉に上られて、相州武士の誉をきつつけてはなりませんぞ」

「有り難うございます。では大聖人さま……」

本間六郎左衛門は、家臣に、三昧堂から、他の適當の地に、大聖人をお移しすることを、命ずると、その夜、一門をひきつれて、早船で鎌倉にむかったのである。

(註一) 六波羅は、京都賀茂川の東辺、北は五条通り、南は六条にあつた。

